

## 『李卓吾先生批評三國志』の版本分化

五藤 嵩也

明代白話小説『三國志演義』（以下『演義』）は、その成立以来複雑な版本分化を経ており、現存するものに限っても数十種類の版本が確認されている。その中でも、明末の思想家・李贄（字は卓吾）の名を標榜して「李卓吾先生批評」を題に冠する諸版本（以下「李評本」）は、清代の文人・毛宗崗が修訂と批評を施した版本（以下「毛宗崗本」）——現在一般的に流通している排印本や訳本が準拠している版本である——の底本に採用されたこともあり、『演義』発展史において重要な位置を占める版本であると考えられている。

李評本の版本分化については、先行研究によって正文や挿図の異同という観点から検討が加えられているが、その最大の特徴とも言い得る批評（特に眉批）の異同の実態については未だ明らかにされていない。

本稿は、李評本における眉批の異同の傾向を分析することにより、改めて各版本間の関係性を解明することを試みるものである<sup>1</sup>。

### 凡例

1. 本稿は基本的に新字体を用いて論述するが、対校する原文については俗字や略字であっても改めずに記すこととする。
2. 本稿中の対校表における原文の位置については、回数を漢数字で、葉数を算用数字で、葉の表裏を各々 a と b で以って示すものとする。例えば「一 2a」は第一回第二葉表を示す。
3. 本稿中の対校表においては、引用箇所該当するテキストが無いものを除いて最上部に示すものを基準とする。それ以下の引用については、読者諸賢の便宜を図るため基準との異同を比較した結果を記号で示すものとする。基準とするテキストと字が同様である場合は○、原文において当該字が空白により脱落している場合は×、印刷

不鮮明などの事情により当該字が判読不能である場合は●で以って示し、異なる字に作っている場合はそのまま記す。環境上打ち出すことが不可能な文字は＝を用いて示し、注にて原文の字形に対する説明を加える。その他、原文では空白になっていないが、基準とするテキストと比べて字が欠落している箇所や、一部版本において衍字が見られる箇所については、版本間の相違点を分かりやすくするため空白を設けた。

## 1 先行研究と問題の所在

現存する『演義』版本の分化状況とそれらの関係は、数々の先行研究によって徐々に明らかにされてきている。以下、李評本に論及している主要な研究成果を列挙し、その概況を把握しておく。

鄭振鐸氏は「三國志演義的演化」において、自身が確認し得た 10 種類の版本が、全て現存最古の版本である「嘉靖本」から派生したものであるという見解を示した<sup>2</sup>。ただし、この見解はその後の諸研究において細かく修正されていくこととなる。

上田望氏は「『三國演義』版本試論——通俗小説の流伝に関する一考察——」において、構成やテキストなどの観点から『演義』諸版本を分類してその関係性を考察している。氏はその中でも、二十四巻構成の嘉靖本をⅠ群に、現在李評本と最もテキストが近いとされている十二巻構成の「夏振宇本」<sup>3</sup>などをⅡ群に、その流れを汲む不分巻百二十回構成の李評本などをⅡ'群に、毛宗崗本をⅥ群に分類しており、これらを文人向けテキストの「『三國志通俗演義』系諸本（二十四巻本系統）」としてまとめている。その上で、Ⅰ群とⅡ群・Ⅱ'群との間に断絶が認められることと、Ⅱ群の版本の中でも特に夏振宇本を起点としてⅡ'群やⅥ群などへ発展していった可能性を指摘している<sup>4</sup>。

魏安氏は『三國演義版本考』において、『演義』の全版本を ABCD の 4 系統に大別し、AB 系統については文章が複雑で論贊が多く挿入されており、史書化の傾向にあることを、CD 系統については文章が簡略で誤字や脱字が散見するということを指摘している。氏はその中でも嘉靖本を A 支に、夏振宇本や李評本を B 支に分類し、前者には人名表記など史書による修訂が部分的に見られ、後者には「関索説話」<sup>5</sup>が見られるという特徴があるとしている<sup>6</sup>。

金文京氏は『三國志演義の世界』において、まず『演義』諸版本を刊行地から江南系と福建系に大別し、前者が高級志向の版本を、後者が通俗志向の版本を主に出版していたとした上で、諸版本を 5 種類に分類している。その中でも、嘉靖本は「葉逢春

本」<sup>7</sup>と共に 1 つ目の「非関索・花関索系」に分類されており<sup>8</sup>、その特徴としては、他の版本に見られる「関索説話」や「花関索説話」<sup>9</sup>がこれら 2 種類の版本には一切見えない点が指摘されている。

また、嘉靖本系統の二十四巻を十二巻とした周日校本<sup>10</sup>や夏振宇本<sup>11</sup>の他、李評本などは「江南本関索系（十二巻本）」に分類されている。この群に属する諸版本は嘉靖本に近いが、異なる点としては「関索説話」や『資治通鑑』などの史書に基づいた 11 の説話、また周静軒の詠史詩が見られることが挙げられる<sup>11</sup>。

中川諭氏は『『三國志演義』版本の研究』において、氏が当時確認し得た『演義』全版本の関係性を論じ、それらを 3 種類の系統——「二十四巻系諸本」、「二十巻繁本系諸本」、「二十巻簡本系諸本」——に大別している。このうち二十四巻系諸本は、上田氏の「I 群・II 群・II' 群・VI 群」、魏氏の「AB 系統」、金氏の「江南本関索系（十二巻本）」に相当し、嘉靖本や周日校本、夏振宇本の他、李評本や毛宗崗本が分類されている<sup>12</sup>。

中川氏の版本分化想定図（前掲書 pp.400-401）に基づき、本稿に関連する版本を中心に分化状況を示すと、以下ようになる。

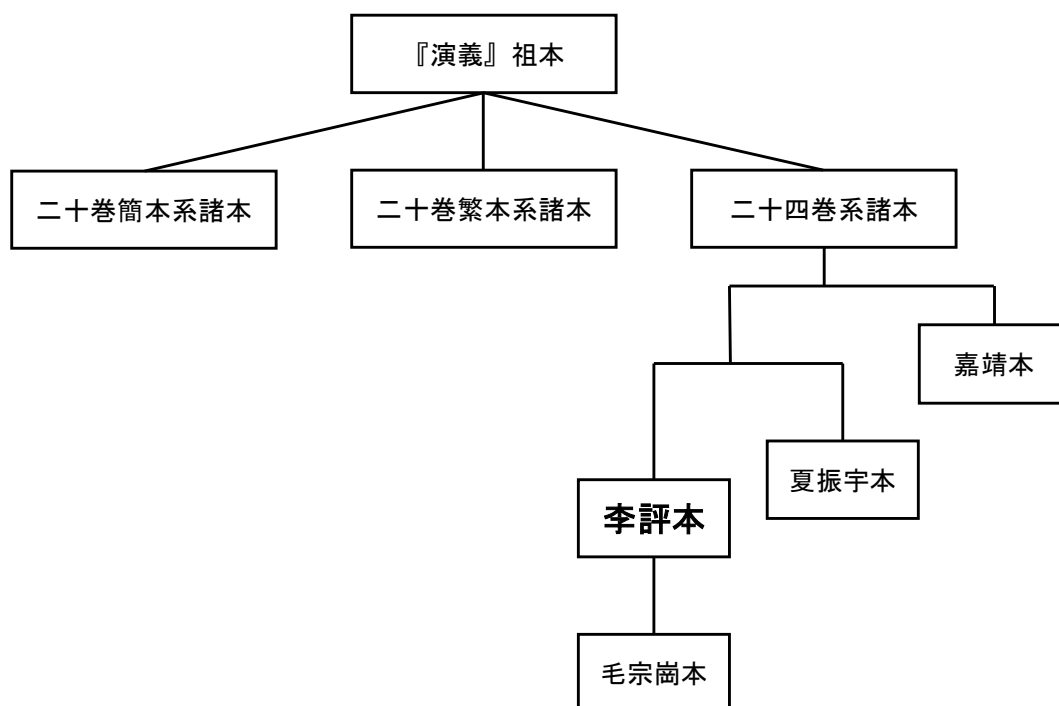


図1 『演義』版本分化の様相

以上の『演義』全版本を一度に対象とした主な研究成果は、いずれも『演義』の版本問題の解明に資する重要な見解を提示しているが、特に中川氏は以上に挙げた先行研究の成果を踏まえて各版本間の関係を体系的に論じており、各李評本間の関係についても考察を行っている。したがって、本稿においては特記の無い限り中川氏の見解に基づいて考察を行うものとする。

続いて李評本を主題とする先行研究を挙げることにしたいが、その前に各論の前提となる各李評本について述べておく必要がある。

現在判明しているだけでも、李評本には6種類の版本が存在している（或いはしていた）とされる。以下、それらの書誌事項を列記するとともに、書名・構成に続けて本稿における略号を括弧内に示す<sup>13</sup>。

・『李卓吾先生批評三國志』 不分卷百二十回（以下「甲本 A」<sup>14</sup>）

明末刊。挿図 120 葉。半葉 10 行×22 字。框郭上に眉批。孫楷第は未見。第六十一回挿図版心下に「君裕劉鐫」とあり、明末の刻工・劉君裕の関与が示唆される。また、部分的に別の版本によって補われている<sup>15</sup>。国家図書館（台北）蔵。

・『李卓吾先生批評三國志』 不分卷百二十回（以下「甲本 B」）

明末刊。挿図 120 葉。半葉 10 行×22 字。框郭上に眉批。構成は甲本 A と同様だが、図像第 2 葉の版心に「書林劉素明全刻像」とあり、明末に活躍したと見られる刻工・劉素明の関与が示唆される<sup>16</sup>他、禿子<sup>17</sup>による序文「序批評三國志通俗演義」の末尾に「建陽吳觀明刻」とある。名古屋市蓬左文庫、市立米沢図書館、静嘉堂文庫など蔵。

・『李卓吾先生批評三國志』 不分卷百二十回（以下「乙本」）

清代（康熙年間）刊<sup>18</sup>。挿図 120 葉。半葉 10 行×22 字。框郭上に眉批。内封に「吳郡綠蔭堂藏版」とある。九州大学附属図書館、京都大学人文科学研究所、フランス国立図書館、南京図書館など蔵。

・『李卓吾先生批評三國志』 不分卷百二十回（以下「丙本」）

清代刊<sup>19</sup>。挿図 120 葉。半葉 10 行×22 字。甲本 A・甲本 B・乙本では框郭上にあった批評が行間に移され、夾批となっている。中国国家図書館蔵本の 1 つ（分類番号

12169) の封面に「藜光樓植槐堂藏板」とある。この他、イエール大学図書館、上海図書館、東京都立中央図書館、早稲田大学図書館（自第七十三回至第七十七回原欠）など蔵<sup>20</sup>。

・『李卓吾先生批評三國志眞本』 不分卷百二十回（以下「丁本」）

刊行年代は未詳<sup>21</sup>。挿図 120 葉。半葉 10 行×22 字。框郭上に眉批。台湾大学蔵本の内封に「吳郡寶翰樓」とある。この他、イエール大学図書館など蔵<sup>22</sup>。

・『李卓吾批三國志傳』 二十卷二百四十則

所在不明。孫楷第は「烟水散人編次本。未見。」と著録しており、筆者も未見である。

このように、題に李贄の名を冠するものに限っても様々な種類の版本が存在している。では、これら李評本同士の関係に論及している先行研究を以下に取り上げ、見解の趨勢を確認しておきたい。

まず上田氏は、前掲論文の中で李評本のうち甲本 B（名古屋市蓬左文庫蔵本）、乙本（『明清善本小説叢刊』初編所収影印本）、丙本（東京都立中央図書館蔵本）の正文を比較検討した上で、その祖本が夏振宇本を底本として成立した可能性を指摘しており、それが甲本 B・丙本に分岐し、乙本は甲本 B から派生したという見解を示している。

中川氏は前掲書の中で、甲本 B（名古屋市蓬左文庫蔵本）・乙本（京都大学人文科学研究所蔵本）・丙本（上海図書館蔵本）のうち、自身が確認し得た第六十一回から第百二十回までの範囲において正文（及び総評）の異同が見られる 16 例を比較している。その結果、甲本 B と乙本が正しく丙本のみが異なるという例と、甲本 B のみが正しく乙本・丙本が同様に誤っているという例が字の異同の大半を占めていることを指摘し、これら 3 種類の版本は甲本 B→乙本→丙本という順で出現したが、各々が覆刻関係にある可能性は高くないと論じている。

中川氏はまた「『李卓吾先生批評三國志』について」において、甲本 A が甲本 B の直接の底本である可能性や、従来「吳觀明本」などの呼称でまとめられていた版本がその群内では同版であることを証明している。さらに、従来の呼称が正確性を期しているとは必ずしも言い難いため、従来の「吳觀明本」を「甲本」、「緑蔭堂本」を「乙本」、「藜光樓本」を「丙本」、「宝翰樓本」（すなわち「眞本」）を「丁本」と称するこ

とを提唱している<sup>23</sup>。

中川氏はさらに『李卓吾先生批評三国志真本』について」において、各機関に所蔵される丁本が同版であること、そしてそこに見える批評が他の李評本の批評と異なる解釈を示しており、丁本が李評本の中でも独立した存在であることを指摘している。また丁本と甲本 A・甲本 B・乙本・丙本との比較を行い、丁本は甲本系の版本に基づいて成立したという可能性を示唆している<sup>24</sup>。

この他、廣澤裕介氏は「明末江南における李卓吾批評白話小説の出版」において、框郭の損壊位置や眉批の印刷状態から、甲本 A と甲本 B の第九十七回から第百十一回までが同版である可能性を指摘している<sup>25</sup>。

また李金泉氏は『李卓吾先生批評三國志』若干版本問題考辨」において、主に挿図の観点から甲本 A・甲本 B・乙本・丙本の関係进行分析している。現存の版本の関係については、まず甲本 A と甲本 B が同版ではないことは確定的だが、両者の継承関係については不明としている。また挿図からは、乙本の底本がどちらかと言えば甲本 B ではなく甲本 A であることを論じ、内封からは丙本が乙本の覆刻であると断じている<sup>26</sup>。

以上のように、李評本同士の版本問題に関する論考も多岐に亘っており、特に正文と挿図の観点から各版本間の関係性や分化傾向が明らかにされてきている。ただし、李評本の端々に見られる批評の観点から各版本の関係にまで論及しているものは管見の限り無く、批評の分化傾向の如何や、正文や挿図の分化傾向との関係については未だ検討の余地があろう。

このような状況を踏まえ、本稿では李評本の中でも近い関係にあるとされている甲本 A・甲本 B・乙本・丙本の対校を行い、これらの関係を考察していく。なお、丁本は他 4 本と比べて眉批が異なっている部分が多いため、本稿では正文の比較において対象に加えるのみとした。また、甲本 A については国家図書館（台北）蔵本のマイクロフィルムを、甲本 B については名古屋市蓬左文庫蔵本のデジタル画像と市立米沢図書館蔵本のデジタル画像<sup>27</sup>を、乙本についてはフランス国立図書館蔵本のデジタル画像<sup>28</sup>と南京図書館蔵本の影印本<sup>29</sup>を、丙本については早稲田大学図書館蔵本のデジタル画像<sup>30</sup>とイエール大学図書館蔵本のデジタル画像<sup>31</sup>を、丁本については台湾大学蔵本のデジタル画像とイエール大学図書館蔵本のデジタル画像を参照した。

## 2 序文の附載状況による版本群の大別

まずは、各版本に附されている序文の種類を概観してみよう。李評本以前の二十四卷系諸本も交えると、以下のようなになる<sup>32</sup>。なお、各版本がその序文を備えている場合は○と、備えていない場合は×と示す。

表1 各版本における序文の附載状況

	嘉靖本 周曰校本 夏振宇本	甲本 A	甲本 B	乙本	丙本	丁本
庸愚子 「三國志通俗演義序」	○	○	○	×	×	×
修髯子 「三國志通俗演義引」	○	×	×	×	×	×
禿子 「序批評三國志通俗演義」	×	○	○	×	×	×
繆尊素 「三國志演義序」	×	○	○	○	○	○ <sup>33</sup>
無名氏 「讀三國史答問」	×	○	○	×	×	×
戴易 「書富春東觀山漢前將軍壯繆關侯祠壁」	×	×	×	○	×	×

二十四卷系諸本のうち、李評本に先立って存在していたと考えられている諸版本には庸愚子の「三國志通俗演義序」（以下「庸愚子序」）と修髯子の「三國志通俗演義引」（以下「修髯子序」）が附されているが、李評本にはそれら以外の様々な序文が附されている。

まず、修髯子序はどの李評本にも附されておらず、逆に繆尊素の「三國志演義序」（以下「繆尊素序」）は嘉靖本以下 3 本には見えないが、李評本についてはいずれの版本にも附されているため、ここから版本間の関係を見出すのは難しい。

一方の庸愚子序は、李評本の中では甲本 A と甲本 B にのみ附されており、これは禿子の「序批評三國志通俗演義」及び作者不詳の「讀三國史答問」についても同様である。また、戴易の「書富春東觀山漢前將軍壯繆關侯祠壁」については乙本にのみ附されており、丙本と丁本には繆尊素序以外の序文が一切附されていない。

このことから、李評本は概ね甲本 A と甲本 B、乙本と丙本（と丁本）という 2 種類の群に大別することができると考えられる。後者の群についてはさらに細分化して考えることも可能かもしれないが、序文自体は後から附加されることもあり、本稿では判断材料に乏しいため論じない。

### 3 挿図及び正文に見る版本分化の傾向

次に、先行研究によって示された挿図や正文の分化状況を整理しておきたい。

まず挿図の分化状況については、李金泉氏が前掲論文において部分的な関係性について推論を提示していたのであった。まず甲本 A と甲本 B の関係については、前者には劉君裕の名が見えるのに対し、後者には劉素明という別人の名が見えることを理由として、両者は同版ではないと断じているが、それらの継承関係については判断材料の寡少さを理由に明言を避けている。その上で、両者に見られる相違点の乙本における状態を確認し、乙本では全ての相違点が甲本 A と同様に描かれていることから、乙本の底本は甲本 B ではなく甲本 A であると推測している。また乙本と丙本については、両者の挿図が同様であることや、内封の框郭内の構成が非常に近似していることを理由として、丙本は乙本の覆刻であるとしている。

次に正文の分化状況については、中川氏が前掲の 2 種類の論文によって部分的に論じている。まず『李卓吾先生批評三国志』については、甲本 B が甲本 A の覆刻であることを指摘し、両版本が直接的な継承関係にあることを立証している。また『李卓吾先生批評三国志真本』については、4 種類の李評本と丁本の正文に見える 45 例の異同を比較し、丁本が他の李評本とどのように異なっているかと



いうことを検討している。なお、当該論文においては、第六十四回以降の例は中川氏前掲書にて取り上げられていたものが流用されているが、丁本の総評は他4本と比べると大きく異なっているため、総評に当たる部分は除外されている。

今回筆者は、中川氏によって指摘された45例とは別の異同例を新たに3例見出した。以下、それらを含む計48例について、テキストが李評本に最も近いとされている夏振宇本を加えた対校表を示す。順番は中川氏前掲論文に則り、筆者が発見した3例はその末尾に加えて示す。また、本稿では可能な限り原文の表記に忠実に従って記しているため、中川氏の翻刻と多少異なる部分があることを予め了解されたい。

表2 正文の異同

	例1 (一 4a)	例2 (二 7a)	例3 (二 7b)
夏振宇本	次収封譖等一千人下獄	張讓等十三人	尚自與闡官共語耶
甲本 A	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○○○○	○○○○○○○○○
甲本 B	○○○○○○○千○○ ○	○○○○○○○	○○○○○○○○○
乙本	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○二○	○○○○○○○○○
丙本	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○二○	○○○×○○○○
丁本	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○○○○	○○○○○○○○○
	例4 (六 6b)	例5 (八 4b)	例6 (十八 4a)
夏振宇本	劫少帝出北邙回宮失此寶	少頃二青衣丫鬟引貂蟬 <sup>34</sup>	故雖用敗兵而戰必勝也
甲本 A	○○○○○印回○○ ○○	○○○○○了○○○ ○	○○○○○○○○○○○ ○
甲本 B	○○○○○印回○○ ○○	○○○○○了○○○ ○	○○○○○○○載○○ ○
乙本	○○○○○○○回○○ ○○	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○○○○○○○○ ○
丙本	○○○○○○○回○○ ○○	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○○○○○○○○ ○

丁本	○○○○○○○○○○ ○○	○○○○○○○○○○ ○	○○○○○○○○○○ ○
	例 7 (二十一 2b)	例 8 (二十九 9a)	例 9 (三十 11b)
夏振宇本	操仰面大笑曰	喚妻橋氏曰	操用其謀
甲本 A	○○○○○○○	○○○○○	○○○○
甲本 B	○○○○○○○	○○喬○○	操○○○
乙本	○抑○○○○	○○○○○	○○○○
丙本	○抑○○○○	○○○○○	○○○○
丁本	○○○○○○○	○○○○○	○○○○
	例 10 (三十二 4a)	例 11 (三十四 9b)	例 12 (三十六 7a)
夏振宇本	就中埋伏刀斧手	兩岸蹄踪埋綠草	吾樗櫟庸才
甲本 A	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○
甲本 B	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○
乙本	○○○○○○○	○○○琮○○○	○○○○○
丙本	○○○伏○○○	○○○宗○○莫	○○○○木
丁本	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○
	例 13 (四十 1b)	例 14 (四十一 12b)	例 15 (四十三 5b)
夏振宇本	張遼張郃爲第一隊 <sup>35</sup>	解開勒甲縵 <sup>36</sup>	劫劉表烏合之衆
甲本 A	○○○○○○○三○	解○○○○	○○○○○○○
甲本 B	○○○○○○○三○	解○○○○	○○○○○○○
乙本	○○○○○○○二○	解○○胷○ <sup>37</sup>	○○○鳥○○○
丙本	○○○○○○○二○	解○○胷○	○○○鳥○○○
丁本	○○○○○○○二○	解○○○○	○○○○○○○
	例 16 (四十四 4b)	例 17 (四十四 4b)	例 18 (四十四 5a)
夏振宇本	誓娶二橋	挾二橋於東南兮	大橋是討虜將軍
甲本 A	○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○
甲本 B	○○○喬	○○喬○○○○	○喬○○○○○
乙本	○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○
丙本	○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○
丁本	○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○
	例 19 (四十四 5a)	例 20 (四十四 7a)	例 21 (四十七 2b)
夏振宇本	小橋乃吾之妻也	今北土未平	糧草軍儲隨船獻納
甲本 A	○○○○○○○	○○○○○	○○○○○○○○○
甲本 B	○喬○○○○○	○○○○乎	○○○○○○○○○

乙本	○○○○○○○○	○○○○○	○○○器○○○○
丙本	○○○○○○○○	○○○○○	○○○器○○○○
丁本	○○○○○○○○	○○○○○	○○○○○○○○○
	例 22 (四十七 6a)	例 23 (四十八 3a)	例 24 (四十八 4b)
夏振宇本	你却盜吾私書	於漳水之上	命請送靈柩
甲本 A	○○○○○○○	○○○○○	○○○○○
甲本 B	○○○○○○○	○○○○○	○○○○○
乙本	○×○○○○○	○○○○土	○○○○○
丙本	○○○○○○○	○○○○土	○○○○櫃
丁本	○○○○○○○	○○○○○	○○○○○
	例 25 (五十二 1a)	例 26 (五十二 3b)	例 27 (五十四 5a)
夏振宇本	即目起兵打南郡	四郡即目何人爲守	適間卜易
甲本 A	卽○○○○○○	○○卽○○○○○	○○十○
甲本 B	卽○○○○○○	○○卽○○○○○	○○十○
乙本	卽○○○○○○	○○卽日○○○○	○○○○
丙本	卽日○○○○○	○○卽日○○○○	○○○○
丁本	卽日○○○○○	○○卽○○○○○	○○○○
	例 28 (五十五 2a)	例 29 (五十五 3a)	例 30 (五十六 7b)
夏振宇本	終非池中之物也	使荊州有失	到今又不動兵
甲本 A	○○○○○○○	○○○○○	○○○○○○○
甲本 B	○○○○○○○	○○川○○	○○○○○○○
乙本	○○○內○○○	○○○○○	他○○○○○
丙本	○○○內○○○	○○○○○	他○○○○○
丁本	○○○○○○○	○○○○○	○○○○○○○
	例 31 (六十 5b)	例 32 (六十 7a)	例 33 (六十四 6b)
夏振宇本	松全無懼怯之意	荊州乃暫借東吳的	可令張翼吳懿引趙雲 撫外水定江捷爲等處 所屬州郡
甲本 A	○○ ○○○○	○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○ ○○○○
甲本 B	○○○○○○○○○ <sup>38</sup>	○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○ ○○○○

乙本	○○○ ○○○	○○可○○○○○	○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○ ○○○○
丙本	○○○ ○○○	○○可○○○○○	○○○○○○○○○○ ○○○○○徧○○○ ○○○○
丁本	○ ○○○○○	○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○ ○○○○
	例 34 (六十六 5a)	例 35 (六十八 12a)	例 36 (六十九 8b)
夏振宇本	左將軍親冒矢石戮力 破 敵	操取觀之一字不差	截住城內救軍
甲本 A	○○○○○○○○○○○ ○破○	○○觀○○○○○	○○○○○○○
甲本 B	○○○○○○○○○○○ ○破○	○○觀○○○○○	○○○○○○○
乙本	○○○○○○○○○○○ ×○○	○又讀○○○○○	○○○○○○○
丙本	○○○○○○○○○○○ ×○○	○又讀○○○○○	○○○向○○
丁本	○○○○○○○○○○○ ○ ○ <sup>39</sup>	○○觀○○○○○	○○○○○○○
	例 37 (六十九 8b)	例 38 (七十九 1b)	例 39 (八十 10a)
夏振宇本	勿似董承自取其禍	所有臨淄侯曹植	幸主公有兩川之地
甲本 A	○○○○○○○○○	○○○○侯○○	○○○○○○○○○
甲本 B	○○○○○○○○○	○○○○侯○○	○○○○○○○○○
乙本	○○○○○收○○	○○○○疾○○	今○○○○○○○
丙本	○○○○○收○○	○○ = ○疾○○ <sup>40</sup>	今○○○○○○○
丁本	○○○○○○○○○	○○○○侯○○	○○○○○○○○○
	例 40 (九十 13b)	例 41 (九十九 6b)	例 42 (百 6b)
夏振宇本	見火必着	自有解危之策	願去者千餘人
甲本 A	○○○著	○○解○○○	○○○百○○
甲本 B	○○○著	○○解○○○	○○○百○○
乙本	○○○著	○○解○○○	○○○○○○○

丙本	○○○燃	目○解○○○	○○○○○○○
丁本	○○○燃	○○解○○○	○○○○○○○
	例 43 (百 7b)	例 44 (百二 12a)	例 45 (百十九 12a)
夏振宇本	史官秉筆而記録	汝二人各引五百軍	付託不專必參枝族
甲本 A	文○○○○○○○	○○○○○百○○	○○○○○○○○○
甲本 B	文○○○○○○○	○○○○○百○○	○○○○○○○○○
乙本	○○○○○○○○○	○○○○○百十○	何○○○○○○○
丙本	○○○○○○○○○	○○○○○○○○○	何○○○○○○○
丁本	○○○○○○○○○	○○○○○○○○○	○○○○○○○○○
	例 46 (一 3b)	例 47 (三十二 2b)	例 48 (三十九 8a)
夏振宇本	令衆以白土寫甲子二字	尚教二人内一人去	哥哥使水去便了
甲本 A	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○○○○○○	○○○○○○○
甲本 B	會○○○上○○○○○ ○	○○三○○○○○	○○你自○○○
乙本	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○○○○○○	○○○○○○○
丙本	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○○○○○○	○○○○○○○
丁本	○○○○○○○○○○○ ○	○○○○○○○○○	○○○○○○○

以上に示した正文の異同状況について、丁本を除く 4 種類の李評本に限って比較分析する。全 48 例のうち、最も多いパターンは甲本 A と甲本 B、乙本と丙本が各々等しい 24 例（例 2、4～8、13～15、21、23、26～28、30、32、34、35、37～39、42、43、45）であり、次いで甲本 B のみが他 3 本と異なる 12 例<sup>41</sup>（例 1、9、10、16～20、29、46～48）、丙本のみが他 3 本と異なる 9 例（例 3、12、24、25、33、36、40、41、44）であった。このことから、丁本を除く 4 種類の李評本はまず甲本 A と甲本 B、乙本と丙本という 2 種類の群に分けられ、甲本 B と丙本がやや異質であると言えるのではないだろうか。

では、正文の異同状況から見たそれぞれの群内における各版本間の関係はどうであろうか。甲本 A と甲本 B については直接的な関係が指摘されていたが、乙本と丙本

については改めて考える必要があるだろう。

上の例を見ると、乙本と丙本が同様に作っているものが大半だが、例 22 のように丙本が乙本のみに見られる脱字を正しく作っている場合や、例 40 のように丙本が甲本 A・甲本 B・乙本とも異なる字に作っているもの、また例 44 のように丙本が夏振宇本と同様に作っているものも認められる。したがって、乙本と丙本は近い関係にあるものの、直接の底本と覆刻という関係にあるわけではないと考えられる。すなわち乙本と丙本は、甲本 A・甲本 B とは別に李評本祖本から分化した共通の、或いは近似の版本（以下「乙・丙祖本」）から、別々に分化して出現したのではないだろうか。

さらに、4 種類の李評本を夏振宇本と比較してみると、甲本 A が夏振宇本と等しい例は 37 例（例 1、2、6～12、14～26、28～30、32、33、35～39、41、45～48）と最多で、甲本 B は 24 例（例 2、7、10～12、14、15、21～26、28、30～33、35～39、41、45）、乙本は 25 例（例 1、4～6、8～10、12、16～20、24、25、27、29、33、36、41～43、46～48）、丙本は 19 例（例 1、4～6、8、9、16～20、22、27、42～44、46～48）が各々夏振宇本と等しいことが分かる。

以上より、4 種類の李評本は正文の異同から甲本 A と甲本 B、乙本と丙本という 2 種類の群に大別され、甲本 B・丙本がそれぞれ甲本 A・乙本の覆刻として刊行された際に他の版本には見られない誤字を生じ、或いは何らかの修訂が施されたと考えられる。また甲本 A は、甲本 B と同じ群であるが乙本との親近性も認められることに加え、他の版本に比べて夏振宇本と一致する部分が極めて多いことから、李評本の祖本の形を最もよく留めている版本である可能性が高いと考えられる。ただし、甲本 A が李評本祖本そのものであるか否かについては、この段階では断定できない。

したがって、先行研究を踏まえて正文の異同状況から李評本の分化状況を図式化すると、以下のようになるのではないだろうか<sup>42</sup>。

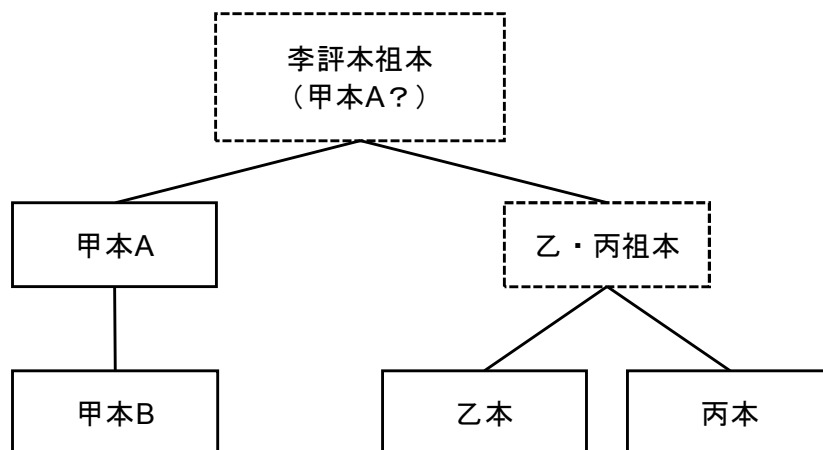


図 2 挿図と正文の状況から想定される李評本の分化状況

このように見ると、挿図や正文の差異から想定される李評本の分化状況は、先に見た序文の附載状況と概ね一致していると言えよう。

#### 4 眉批の異同に見る版本分化の傾向

次に、眉批の異同から李評本の分化傾向を検討していくことにしたい。眉批の異同状況は多様であるため、大凡の傾向ごとに例を分けて以下に示す。

	1 (七 6b)	2 (二十七 7a)	3 (四十九 8b)
甲本 A	子龍具眼。玄德亦善用收拾也。	眞。	孔明老賊、最會頑皮。
甲本 B	○○○○。○○○○○ ○○○。	○。	○○○○、○○○○。
乙本	(無し)	(無し)	(無し)
丙本	(無し)	(無し)	(無し)
	4 (九十七 6a)	5 (百二 13a)	6 (百十一 9b)
甲本 A	(無し)	粧神作鬼、此孔明兒戲。 好看、好看。	(無し)
甲本 B	(無し)	○○○○、○○○○○。 ○○、○○。	(無し)
乙本	是。	(無し)	說得好聽。
丙本	○。	(無し)	○○○听。

表 3 甲本 A・甲本 B と乙本・丙本における眉批の脱落

表 4 甲本 A・甲本 B と乙本・丙本における眉批の誤字

	7 (二 9a) <sup>43</sup>	8 (二十六 9a) <sup>44</sup>	9 (六十 16a) <sup>45</sup>
甲本 A	入宮之妬如此。	眞情實話。	季玉固是好人、亦是滯貨。玄德亦是好人、但貨不滯。
甲本 B	○○○○○○○○。	○○○○。	○○○○○○○、○○○ ○。○○○○○○○、○ ○○○。

乙本	○○○妬○○。	○○冤○。	○○○○○○○、○○○ 刘。○○○○○○○、○ ○○○。
丙本	○○○妬○○。	○○冤○。	○○○○○○○、○○○ 刘。○○○○○○○、○ ○○○。
	10 (六十七 7a) <sup>46</sup>	11 (六十九 9b) <sup>47</sup>	
甲本 A	可馬懿、劉曄之見、未 爲不是。然老瞞實有惧 心借知是而止兵。眞老 奸也。	耿、韋、金、吉、五先 生的的漢家功臣。不可 以成敗論也。	
甲本 B	○○○、○○○○、○ ○○○。○○○○○○○ ○○○○○○○○○。○○ ○○。	○、○、○、○、○○ ○○○○○○○○○。○○ ○○○○○○○。	
乙本	司○○、刘○○○、○ ○○○。○○○○○○○ ○○○○○○○○○。○○ ○○。	○、○、○、○、○○ ○○○住○○○。○○ ○○○○○。	
丙本	司○○、刘○○○、○ ○○○。○○○○○○○ ○○○○○○○○○。○○ ○○。	○、○、○、○、○○ ○○○住○○○。○○ ○○○○○。	

表 5 乙本・丙本における眉批の腰斬

	12 (四十六 1b)	13 (四十八 5b)	14 (五十二 1a)
甲本 A	周瑜忌才、實忌勝己者 耳。還是英雄相忌之常。 如今人忌才、大爲可笑。 己爲狗也而忌麒麟。己爲 鷄也而忌鳳凰。己爲 蚯蚓也而忌蛟龍。不大 多事乎。不大扯淡乎。 眞可發一大笑。	大是、大是。但言其常 耳。既言天時獨不可以 人力爲之乎。古云、偷 天換日。●本自有如此 手段。借風、其小者耳。	子敬還老成。



甲本 B	○○○○、○○○○○ ○。○○○○○○○○○。 ○○○○○、○○○○。 ○○○○○○○○○。○ ○○○○○○○○○。○○ ○○○○○○○○○。○○ ○○○。○○○○○。 ○○○○○。	○○、○○。○○○○ ○。○○○○○○○○○ ○○○○○。○○、○ ○○○。●○○○○○ ○○。○○、○○○○ <sup>48</sup> 。	○○○○○。
乙本	○○○○、○○○○○ ○。○○○○○○○○○。 ○○○○○、○○○○。 ○○○○××××。 (「己爲狗也」以下は 断絶)	○○、○○。○○○○ ×。(「但言其常」以 下は断絶)	○○○○×。
丙本	○○○○、○○○○○ ○。○○○○○○○○○。 ○○○○○、○○○○。 ○○○○××××。 (「己爲狗也」以下は 断絶)	○○、○○。○○○○ ×。(「但言其常」以 下は断絶)	○○○○×。

表 6 乙本から丙本への継承を示唆する眉批

	15 (三十九 5a)	16 (六十 4a) <sup>49</sup>	17 (百十九 5b)
甲本 A	公子亦通。	壓倒老奸、更有手段。	千古公論。
甲本 B	○○○○。	○○○○、○○○○。	○○○○。
乙本	劉琦○○。	×○○○、×○○○。	万○○○。
丙本	劉奇○○。	×○○○、×○○○。	方○○○。

表 7 乙本のみにおける眉批の脱落

	18 (五十八 4a)	19 (六十 6b)	20 (八十五 11b)
甲本 A	此時已有内應入城了。	此是孔明妙用。正要形容孟德短處也。	神矣。
甲本 B	○○○○○○○○○○○。	○○○○○○○。○○○ ○○○○○○○。	○○。

乙本	(無し)	(無し)	(無し)
丙本	○○○○○○○○○○。	○○○○○○○。○○○ ○○○悪○○。	○也。
	21 (百十四 8a)		
甲本 A	借他、跌他。妙甚、妙甚。		
甲本 B	○○、○○。○○、○○。		
乙本	(無し)		
丙本	○○、○○。○○、○○。		

表 8 甲本 B のみにおける眉批の脱落

	22 (五 14a)	23 (二十五 11a)	24 (五十九 7a)
甲本 A	翼德千古快人。	天人也。神人也。	韓公好人。
甲本 B	(無し)	(無し)	(無し)
乙本	○○○○○○○。	○○○。○○○。	○○○○○。
丙本	○○○○○○○。	○○○。○○○。	○○○○○。
	25 (八十八 11a)	26 (百十四 7b)	
甲本 A	此是老主意。	是。	
甲本 B	(無し)	(無し)	
乙本	○○○○○。	○。	
丙本	○○○○○。	○。	

表 9 甲本 B のみにおける字の異同

	27 (三 2b) <sup>50</sup>	28 (六十七 4a) <sup>51</sup>	29 (九十 12b) <sup>52</sup>
甲本 A	何進不聽好人之言。眞奴才也。如此人若何不敗。	的的愛才、眞奸雄也。	孟獲大呆。非関諸葛智也。
甲本 B	○○○听○○○○。○ ○材○。○○○○○○○ ○。	○○○木、○○○○。	○○○○○。○關○○○ ○。
乙本	○○○○○○○○○○。○ ○○○。○○○○○○○ ○。	○○○○○、○○○○○。	○○○○○。○○○○○ ○。

丙本	○○○○○○○○。○ ○○○。○○○○○○ ○。	○○○○、○○○○。	○○○○。○○○○○ ○。
	30 (百一 12a) <sup>53</sup>		
甲本 A	毎毎遭此一時便知天意 矣。		
甲本 B	○○○○字肘○○○○ ○。		
乙本	○○○○○○○○○○○ ○。		
丙本	○○○○○○○○○○○ ○。		

では、これらの眉批の異同例から李評本の分化状況を考察していこう。

まず例 1～例 14 を見ると、眉批の誤脱の状況は甲本 A と甲本 B、乙本と丙本の間において全く同様である。また例 15～例 17 からは、乙本と丙本の表記が近似した形で甲本 A や甲本 B の表記と一線を画していることが分かる。以上の例より、甲本 A と甲本 B、乙本と丙本には一定の親近性が認められ、4 種類の李評本は正文や挿図と同様にこれら 2 種類の群に大別され得る。

続いて、乙本と丙本の関係について詳しく検討してみよう。例 14 と例 16 において、乙本で脱落している字は、甲本 A や甲本 B における 4 字 1 行の眉批の最上段に位置している字である。乙本はこれらと同様に眉批の体裁を取っているため、この脱字の発生要因は印刷段階における過誤或いは摩耗であるという可能性も一応は考えられよう。しかし、眉批ではなく夾批の体裁を取っている丙本においても、乙本と全く同じ字が脱落しているのである。この丙本の脱字は、前提として乙本が存在し、その脱字を踏襲したことによって発生したものであると考えられるのではないだろうか。

また例 15 は、荊州牧・劉表の長子である劉琦が、劉表の後妻である蔡夫人の陰謀を恐れて諸葛亮に相談する場面への批評であるため、甲本 A や甲本 B の表記は言うまでも無く、乙本の表記でも全く問題無い。一方、丙本では「劉奇」に作っており、本来の人名を考えれば誤りである。正文は「劉琦」に作っているため、この誤字は唐突に発生したものであるようにも思えるが、これは丙本が乙本の「劉琦」という表記を踏襲した上で、字の省略や音通などの原因によって「劉奇」という表記に作った可能性が考えられる。

そして例 17 は、蜀漢の姜維が魏を混乱させる計略に失敗して処刑される場面に引用される、『三國志』裴松之注に対する批評である。こちらも甲本 A と甲本 B の表記は無論のこと、乙本の表記であっても意味は問題無く通じるが、丙本の表記は明らかに誤っている。この誤字も唐突に発生したものとは考え難く、乙本の「万古」という表記を踏襲して字を誤り、「方古」に作ってしまったのではないだろうか。

以上の例からは、丙本が乙本を底本として成立し、その際に乙本の眉批における脱字も継承してしまったという可能性が考えられる。

しかし一方で、例 18～例 21 のように、乙本には見えない眉批が丙本では甲本 A や甲本 B とほとんど同じ形で備わっている場合もある。したがって、丙本は乙本を直接の底本としたわけではなく、やはり甲本 A や甲本 B とは群を別にする同一の、或いは近似の版本——すなわち乙・丙祖本——から別々に出現したものと考えるのが妥当であろう。

続いて、甲本 B に着目してみよう。例 22～例 30 では、甲本 B のみが他 3 本と比べて様々な形で異なっている。このことから、乙・丙祖本は甲本 B よりも甲本 A に近い形であったと考えられる。仮に甲本 B が甲本 A の覆刻だとしても、その覆刻に際して何らかの意図的な編集が加えられていた可能性は十分にあり得るだろう。

最後に、甲本 A について考えてみたい。甲本 A は、他の版本と比べるとここで挙げた眉批の大半を誤脱無く備えているが、しかしその故のみを以って甲本 A が李評本祖本そのものであると断定することはできず、また実際にそうではないと思われる。仮にそうであるならば、例 4・例 6 のように乙本・丙本にのみ見られる眉批が存在することとの整合性が取れないからである。無論、李評本祖本の時点では無かった眉批が、乙・丙祖本の段階に至って新たに附加された可能性も否定できない。しかし、丁本のように眉批の位置や内容が大きく変わっているわけではないため、一部の眉批が後に書き加えられたことを検証するにはより慎重な検討が必要になるだろう。

したがって、現時点においては、甲本 A は李評本祖本そのものではない可能性が高いが、その形を最もよく留めている版本であるということ指摘するに留めておく。

さて、ここまで述べて来た眉批の分化傾向を纏めて図式化すると、以下のような図になるのではないだろうか。

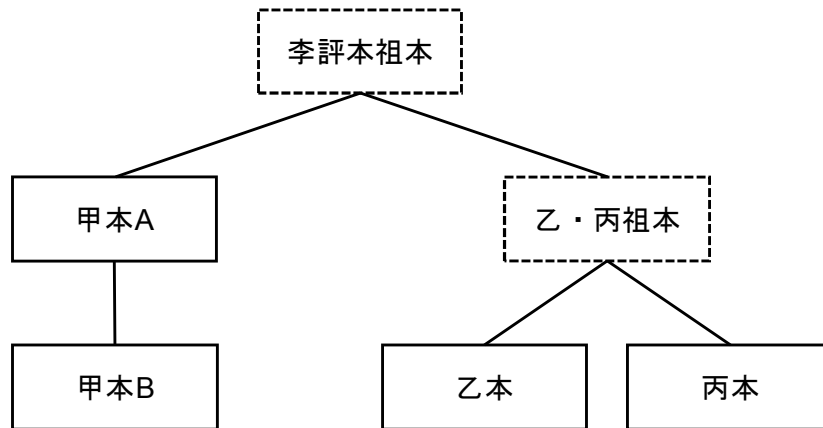


図3 眉批の異同から推定される李評本の分化状況

このように、李評本の分化状況は、正文の異同から考えられるものと眉批の異同から想定されるものとでほとんど相違が無く、各々の傾向は一致していると言える。また、甲本Aが李評本祖本であるか否かについて、正文の異同という観点からは明確な結論を出すことは難しい状況にあった。しかし眉批の異同に着目すると、甲本Aは李評本祖本に最も近い形を留めているが、それ自体ではないという可能性が高いと考えられる。

## 5 小結

以上、『演義』李評本の分化傾向を考察した。本稿では正文と眉批の異同に一定のパターンを見出すことによって分析を進めたが、その過程において現存が確認されていないバージョンの存在を仮定せざるを得なかった。今後新たな李評本が発見されればさらに精密な検討が可能になるが、本稿では現状判明している事項から推定される結論に留めておく他無い。

また、丁本については正文の比較対象として挙げるのみであったが、眉批についての仔細な分析が行われれば、李評本全体の詳細な分化状況を解明することができると考えられる。今後の課題としたい。

「李卓吾先生批評」を題に冠する版本は、『演義』のみならず『水滸傳』や『西遊記』などの他作品にも存在している。それらとの関係性について、本稿で提示した李

評本『演義』の分化傾向との関連も含めて検討していけば、明代白話小説の流通・発展の様相がさらに明らかになるものと思われる。

## 注

<sup>1</sup>批評の内容については、拙稿「『三國志演義』託李評の位相」（『明日へ翔ぶ——人文社会学の新視点——』5、風間書房、2020年）を参照されたい。

<sup>2</sup>『小説月報』20（10）、上海商務印書館、1929年（東豊書店影印本（1979年）を参照）。

<sup>3</sup>名古屋市蓬左文庫蔵。

<sup>4</sup>『東洋文化』71、東京大学東洋文化研究所、1990年。

<sup>5</sup>諸葛亮が南蛮征伐を行う場面で、関羽の子を名乗る関索という人物が突如登場し、しばらく活躍した後にもまた突如姿を消してしまうというもの。李評本では第八十七回～第八十九回に相当する。

<sup>6</sup>上海古籍出版社、1996年。

<sup>7</sup>王立エル・エスコリアル修道院図書館（マドリード）蔵。全十巻構成だが、巻三と巻十を欠く。

<sup>8</sup>金氏は2010年の増補版において、葉逢春本の刊行年代も嘉靖年間であるという事情に鑑み、従来「嘉靖本」と称されてきた版本については序文の作者の名を採って「張尚徳本」と称している（p.21）。ただし、本稿では葉逢春本は特に取り上げないため、通称の「嘉靖本」を用いることとする。なお、嘉靖本は江南系、葉逢春本は福建系に分類されている。

<sup>9</sup>やはり関羽の子を名乗る関索という人物が、荊州攻略中の関羽の前に突如現れて生い立ちを話すというもの。こちらは特に関索が活躍する場面は見られず、後に関羽が亡くなる場面において、同じく関羽の子である関興によってその病死の報が劉備に伝えられるだけである。

<sup>10</sup>名古屋市蓬左文庫など蔵。

<sup>11</sup>東方書店、1993年（増補版2010年）。

<sup>12</sup>汲古書院、1998年。

<sup>13</sup>孫楷第『中國通俗小説書目』（中華書局、2012年）、魏安『三國演義版本考』（上海古籍出版社、1996年）、中川諭『李卓吾先生批評三國志』について（『三國志研究』11、2016年）を参照した。

<sup>14</sup>以下、李評本の各版本の呼称については中川氏前掲論文 p.120 に基づくものとする。ただし、各版本に論及している先行研究を提示する際には、その研究段階における情報の正確性を期し、各研究者の意図を尊重するため従来の呼称を用いる。なお、甲本 A、甲本 B、乙本、丙本、丁本は従来各々「劉君裕本」、「呉観明本」、「緑蔭堂本」、「藜光楼本」、「宝翰楼本」と呼ばれていた版本である。

<sup>15</sup>補われていると思われる部分の批評は、眉批ではなく夾批の体裁を取っている。丙本では他の版本において眉批であったものが夾批になっているため、或いは丙本かそれに類する版本で補われているものと考えられる。

<sup>16</sup>詳細は中川氏前掲書 pp.99-100 を参照されたい。

<sup>17</sup>「禿子」という名は、李贄の号である「禿翁」を意識したものであると考えられ、当時の読者に対してこれに附された批評が李贄の手に成るものであるということを宣伝する意図があったと思われる。

<sup>18</sup>中川氏は前掲書 p.100 において、乙本冒頭の目録に見える「劉玄德」の「玄」字が欠筆になっていることに触れ、これは康熙帝の諱（玄燁）を避けたことにより発生したものであるため、乙本は康熙年間以降に刊行されたとしている。また、乙本に附される戴易の「書富春東觀山漢前將軍壯繆關侯祠壁」には「予於庚戌二月肅、謁侯祠……」とあり、この「庚戌」は康熙年間以降であることを考えると、乙本の刊行は早くとも康熙9年（西暦1670年）であると述べている。

<sup>19</sup>中川氏は前掲書 p.106 において、後述の通り甲本 B・乙本・丙本のうち甲本 B が最初に出現し、次いで乙本、最後に丙本が出現した可能性を指摘している。

<sup>20</sup>イェール大学図書館蔵本の内封には「古吳三槐堂三樂齋三才堂藏板」とある。また早稲田大学図書館

蔵本の内封には乙本と同じく「呉郡綠蔭堂藏板」とあるが、正文は丙本の系統であることが中川氏前掲論文において論証されているため、本稿でも丙本として扱う。

<sup>21</sup>張寶三（主編）『臺灣大學圖書館藏珍本東亞文獻目錄——中國古籍篇』（臺大出版中心、2013年）p.136には「清初呉郡寶翰樓刻本」とある。

<sup>22</sup>台湾大学蔵本は中川氏前掲論文では論及されておらず、他の機関に所蔵される丁本と同版であるという確証は（可能性としては高いが）現時点では得られていないことを附記しておく。

<sup>23</sup>『三国志研究』11、三国志学会編、2016年。

<sup>24</sup>『狩野直禎先生米寿記念三国志論集』、三国志学会編、2016年。なお、注22にて述べた通り、台湾大学蔵本については論及されていない。

<sup>25</sup>『未名』24、中文研究会、2006年。

<sup>26</sup>『中国古典小説研究』13、中国古典小説研究会、2008年。

<sup>27</sup>市立米沢図書館蔵本はオンラインにて参照した。URL：<http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA107.html>（閲覧日：2019年10月5日）

<sup>28</sup>オンラインにて参照した。URL：<https://archivesetmanuscripts.bnf.fr/ark:/12148/cc268561>（閲覧日：2019年8月21日）

<sup>29</sup>陳翔華（主編）『三國志古版叢刊續輯』所収『南京藏本李卓吾評本三國志』（中華全國圖書館文獻縮微複製中心、2004年）を参照した。

<sup>30</sup>オンラインにて参照した。URL：[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he21/he21\\_03536/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he21/he21_03536/index.html)（閲覧日：2019年8月21日）

<sup>31</sup>イェール大学図書館蔵本については、同館司書である孟振華氏の許可を得て、中川氏がかつて撮影した画像データを氏のご厚意によって参照させていただいた。丁本についても同様である。

<sup>32</sup>魏氏前掲書も参照した。

<sup>33</sup>丁本では末尾に「卓吾李贄題」とあるが、内容は他の版本に附載される繆尊素序と同一である。

<sup>34</sup>6字目「𠄎」字は、原文では下部が左上に跳ねているため「了」字にも認め得るが、中央上部に明らかな空白が見えることからここでは「𠄎」字に解する。

<sup>35</sup>7字目「一」字は、原文では不自然に下側に偏っている。直前に「曹仁曹洪先鋒」、直後に「夏侯惇夏侯淵第三隊」とあるため、本来は「二」字であったものと思われる。ただし、確証に欠けるためここでは「一」字として考える。

<sup>36</sup>1字目「解」字は「解」字の異体字である。

<sup>37</sup>4字目「𠄎」字は「胸」字の異体字である。

<sup>38</sup>中川氏前掲論文でも指摘されている通り、この箇所的前半部分は本来3字分と思われる領域に4字を組み込んでいるため、配列が不自然になっている。

<sup>39</sup>丁本では他4本における衍字（「破」字）が削られており、その分一字ずつ前にずれている。

<sup>40</sup>3字目は、原文では草冠の下に「中」字、その下に「𠄎」字を横に3個並べた字を作る。

<sup>41</sup>なお、中川氏は甲本Bと丁本が等しい例として例31を挙げているが、氏の対校表を見ると甲本Bと丁本の間には「全」字の有無という相違が認められる。実際、丁本には「全」字は無く、甲本Bのように3字分の領域に4字を組み込んだ形跡も見られない。したがって、本稿でも例31は甲本Bと丁本のテキストは異なっているものとして扱う。

<sup>42</sup>図にて示した版本のうち、実線にて囲んだものは現存が確認されている版本であり、点線にて囲んだものは先行研究及び本稿における考察から、その存在が推定されるが現存が確認されていない版本である。以下も同様である。

<sup>43</sup>後漢の靈帝の夫人である何皇后が、彼の子（後の献帝）を生んだ王美人を疎んで殺害した場面への批評である。したがって、甲本Aと甲本Bの表記が正しく、乙本と丙本の表記は字体の近似による誤りであろう。

<sup>44</sup>一時的に曹操に投降した関羽が劉備からの書簡を受け取り、その返書を認める場面への批評である。

返書の内容は劉備への忠誠心を再確認するものであるため、甲本 A や甲本 B が「情實」すなわち「真心からのものである」と評するのが妥当であり、一方乙本や丙本が「情冤」すなわち「是と非」と評するのは妥当ではなかろう。

<sup>45</sup>益州牧・劉璋が周囲の諫言を聴き入れず、劉備を受け入れようとする場面への批評である。甲本 A や甲本 B は劉表を「滯貨」すなわち「使えない人物である」と評しているが、乙本と丙本の文面では意味が通じない。これは「貨」字及び「刈」字の字形が混同されてしまったことと、その直後に「玄德」とあることによって生じた誤りであると思われる。

<sup>46</sup>司馬懿と劉曄が益州への即時侵攻を曹操に提言したが、曹操は兵の休養を理由に反対したという場面への批評である。甲本 A と甲本 B は「司馬懿」を「可馬懿」と誤っているが、これも字形の近似による誤りであろう。一方乙本と丙本では「司馬懿」と正しく作っているが、こちらでは「劉」字を「刈」字に略している。

<sup>47</sup>曹操の専横を憂えた耿紀・韋晃・金禕・吉邈・吉穆の 5 人が反乱を起こすが、結局鎮圧・処刑されてしまう場面への批評である。これも甲本 A と甲本 B のように作るのが正しく、乙本と丙本の表記では意味が通じない。この誤りは、直後の「家」字に釣られて発生したものであろう。

<sup>48</sup>名古屋市蓬左文庫蔵本では、4 字 1 行の眉批のうち 5 行目～8 行目の上部が破損しており判読不能である。一方、市立米沢図書館蔵本の眉批は破損しておらず、ほぼ全体が鮮明に判読可能であるため、この部分に限り市立米沢図書館蔵本に基づいて記す。なお、●にて表した字は市立米沢図書館蔵本でも薄れていて判読困難だが、「西」字或いは「匹」字に認め得る。

<sup>49</sup>益州牧・劉璋の使者として曹操に助力を求めた張松が、曹操の面前で楊脩との論争を展開する場面への批評である。乙本や丙本の表記でも大意は通じるが、表現としてはやや不自然であり、これも甲本 A や甲本 B の表記が正しいと見るべきであろう。

<sup>50</sup>宦官誅殺を図る何進が部下に諫められる場面への批評である。甲本 B 以外の版本では「聽」「奴才」に作られている部分が、甲本 B では「听」「奴材」と俗字や同音異字に作られている。

<sup>51</sup>漢中の地を巡って張魯と争う曹操のもとに、張魯の部下である楊松が投降してきたことを曹操が喜んだ場面への批評である。当然ながら甲本 A・乙本・丙本が「才」字に作るのが正しく、甲本 B が「木」字に作るのは誤りである。これは字体が近似しているために誤ったものと思われる。

<sup>52</sup>南蛮王・孟獲が、諸葛亮の計略の一環である偽りの投降をした敵兵を妄信してしまう場面への批評である。甲本 B のみが「關」と正字体に作っており、他 3 種類の版本はいずれも「関」と略字に作る。

<sup>53</sup>北伐で魏軍に大勝した諸葛亮が、蜀漢の危急を知らせる李平の書簡によって止むを得ず成都に帰還したが、その書簡は李平が自身の過失を隠蔽するための偽装工作であったことが発覚したという場面への批評である。甲本 B の記述では意味が通ぜず、これも字体の近似による誤りと思われる。

## 引用文献

日本語文献は著者名五十音順、中国語文献は著者名拼音順に記す。同一の著者によるものが複数ある場合は刊行年代順に記す。

### 日本語文献

上田望『『三国演義』版本試論——通俗小説の流伝に関する一考察——』（『東洋文化』

71、東京大学東洋文化研究所、1990 年）

金文京『三国志演義の世界』（東方書店、初版 1993 年、増補版 2010 年）



中川諭 『『三國志演義』 版本の研究』 (汲古書院、1998 年)

中川諭 「『李卓吾先生批評三國志真本』 について」 (『狩野直禎先生米寿記念三國志論集』、三國志学会、2016 年)

中川諭 「『李卓吾先生批評三國志』 について」 (『三國志研究』 11、三國志学会、2016 年)

廣澤裕介 「明末江南における李卓吾批評白話小説の出版」 (『未名』 24、中文研究会、2006 年)

### 中国語文献

李金泉 「『李卓吾先生批評三國志』 若干版本問題考辨」 (『中国古典小説研究』 13、中国古典小説研究会、2008 年)

孫楷第 『中國通俗小説書目 (外二種)』 (中華書局、2012 年)

魏安 『三國演義版本考』 (上海古籍出版社、1996 年)

張寶三 (主編) 『臺灣大學圖書館藏珍本東亞文獻目錄——中國古籍篇』 (臺大出版中心、2013 年)

鄭振鐸 「三國志演義的演化」 (『小説月報』 20 (10)、上海商務印書館、1929 年 (東豐書店影印本 (1979 年) を参照))

### 謝辞

本稿の執筆に当たっては、『演義』 諸版本を所蔵する諸機関が公開している画像データを参照した。その他国家図書館 (台北)、台湾大学、名古屋市蓬左文庫にはマイクロフィルムや画像データを提供していただいた。また李評本丁本については、イェール大学図書館司書である孟振華氏の御許可のもと、立正大学の中川諭氏の御厚意により氏が過去に撮影した画像データを閲覧させていただく機会に恵まれた。この場を借りて関係諸氏に厚く御礼申し上げる。

